

# AMDA 海外レポート

岡山市に本部を置く国際医療ボランティアAMDA。「多様性の共存」「相互扶助」の理念のもと、1984年の設立以来、世界各地の災害・紛争地域で緊急人道支援活動や復興支援に取り組んできた。民族や宗教、文化の違いを超えて結ばれた国際ネットワークは32支部。アジアを中心とする外国人スタッフに各国の歴史や現状、AMDAが果たしてきた役割を報告してもらい、国際貢献の在り方や世界平和への道を考える。(月1回掲載)

私が生まれたスリランカには悲惨な過去があります。1983年から26年間、民間の激しい戦闘があり、犠牲者は10万人以上にのぼりました。特に北部では各家庭1人くらいの多くの死者が出ました。

私も15歳の時、内戦で両親を失い、とても悲しく寂しい思いをしました。しかし、苦しい経験が私の転機となりました。世界各地で困っている多くの人々を助けたいと思ったのです。

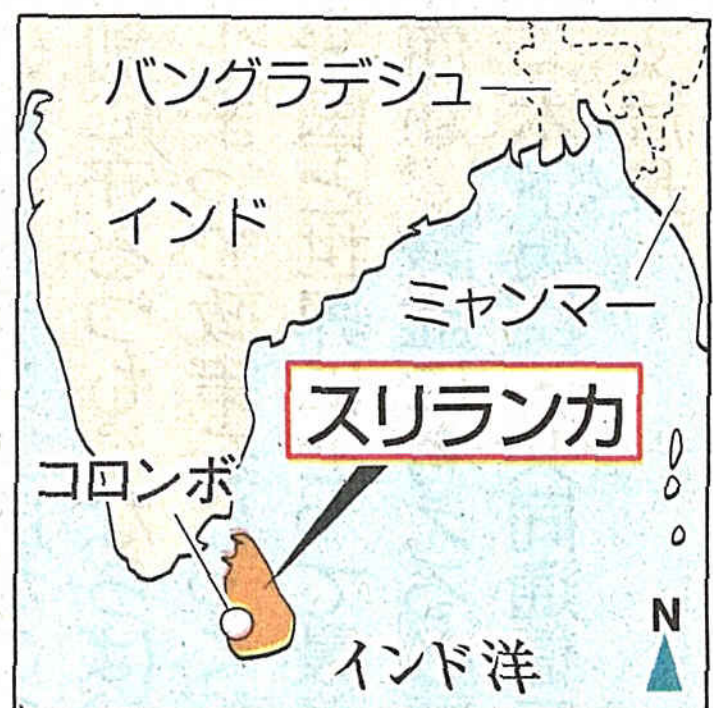
内戦は2009年に終結し、住民らは復興に立ち上がりました。南部にある国内最大の都市コロンボでは高層ビルが並び、道路もきれいに整備されています。

農村部ではれんが造りの家々が豊かな自然に囲まれ、野生のゾウを見かけることもあります。子どもも元気に学校に通うなど内戦終結から約7年が経過し、各地は紛争前と同様な姿に戻りました。

表面上は復興が進んでいますが、特に北部と東部には内戦による大きな爪痕が残っています。建物の壁には今も銃弾の跡があり、地雷がいたるところに埋設されたままです。NGOが地雷撤去に努めていますが、あまり進んでいないのが実情です。手足を切断された子どもの姿を多く見かけます。若者は欧州やインドなどに次々と移住しています。

国民みんなが「もう紛争はしたくない」と願っており、相対立していた多数派シンハラ、少数派タミルの両民族とも大切にしていた文化、宗教を前面に出すことに遠慮

## 内戦の傷いまだ消えず 偏見超え若者ら交流



### 1 スリランカ



AMDAインターナショナル事務局長  
ニッティヤン・ヴィーラヴァーグさん(47)

熱帯性の気候で高温多湿。人口2100万人。面積は6万5600平方キロで北海道の8割程度の広さ。公用語はシンハラ語とタミル語。主要産業は農業で、日本にも紅茶などを輸出している。2004年のインド洋大津波では大きな被害を受け、AMDAも支援活動を行った。

がちとなつていきます。私には失われた人間の尊厳がまだ回復に至っていないように思えます。この尊厳の回復こそ私の願いです。「戦争は破壊、平和は創造」とあらためて痛感しています。

民族紛争が停戦となった2003年から約3年間、AMDAは医療和平プロジェクトに乗り出しました。すべての民族を対象に巡回診療を行い、学校では保健教育などに取り組みました。「命の普遍性はイデオロギーを超える」というAMDAの理念が受け入れられたのです。

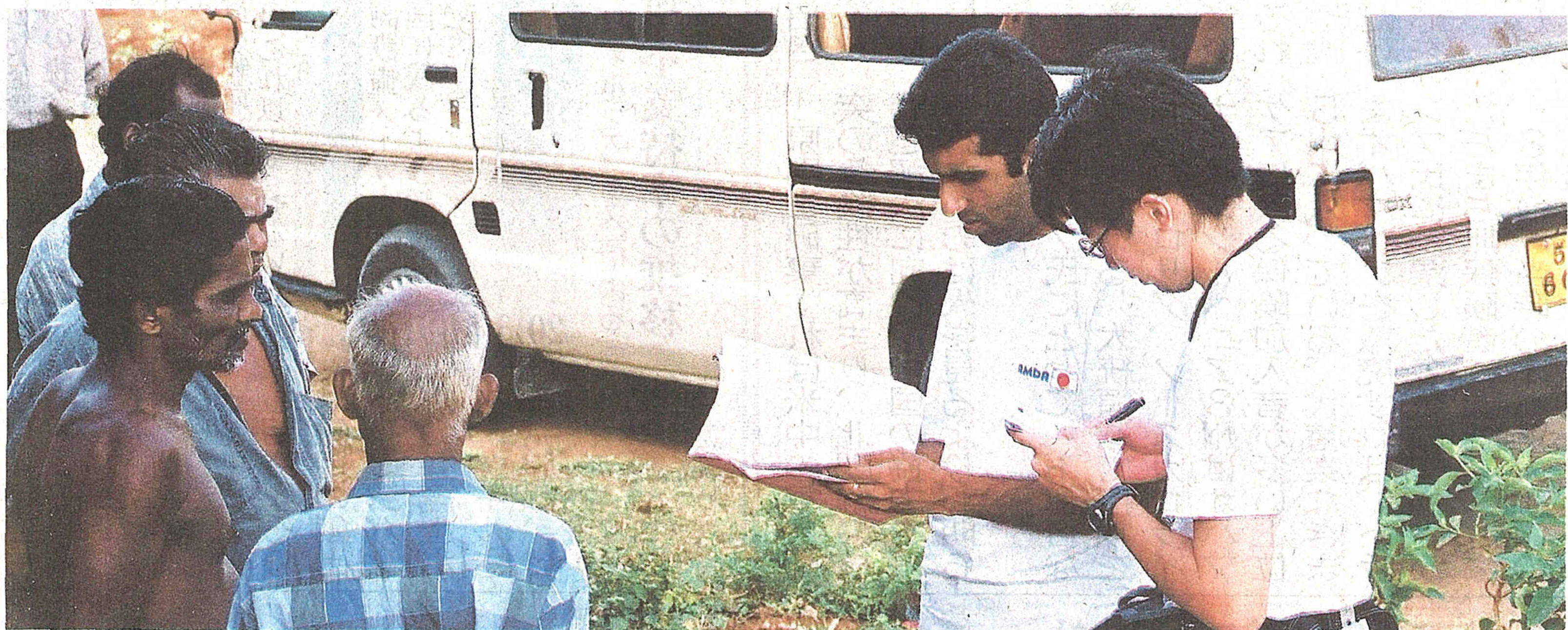
私は2003年にAMDAに加わりました。人生の大きなターニングポイントでした。とてもうれしかったのを今も鮮明に覚えています。

紛争の再燃でAMDAの活動は途切れましたが、内戦終結後はAMDA中学高校生会(事務局・岡山市)による「平和構築プログラム活動」に受け継がれています。

この取り組みは年1回、スリランカ国内で各民族の若者が集い、宗教と文化、スポーツなどを通じて交流するものです。参加者が心を許し合い、相互の「多様性」を認め合う姿に大きな期待を寄せています。

内戦では大きな犠牲を負いましたが、紛争前にあった民族間の偏見は若者を中心に少しずつ消えつつあります。新しいスリランカが生まれようとしているのです。この輪が広がることを願い、祖国のため、世界のために全力を注ぎたいと思っています。

スリランカで医療和平プロジェクトに取り組むAMDAスタッフ(右の2人)ら=2003年



## 海外32支部

### 災害・紛争時に支援

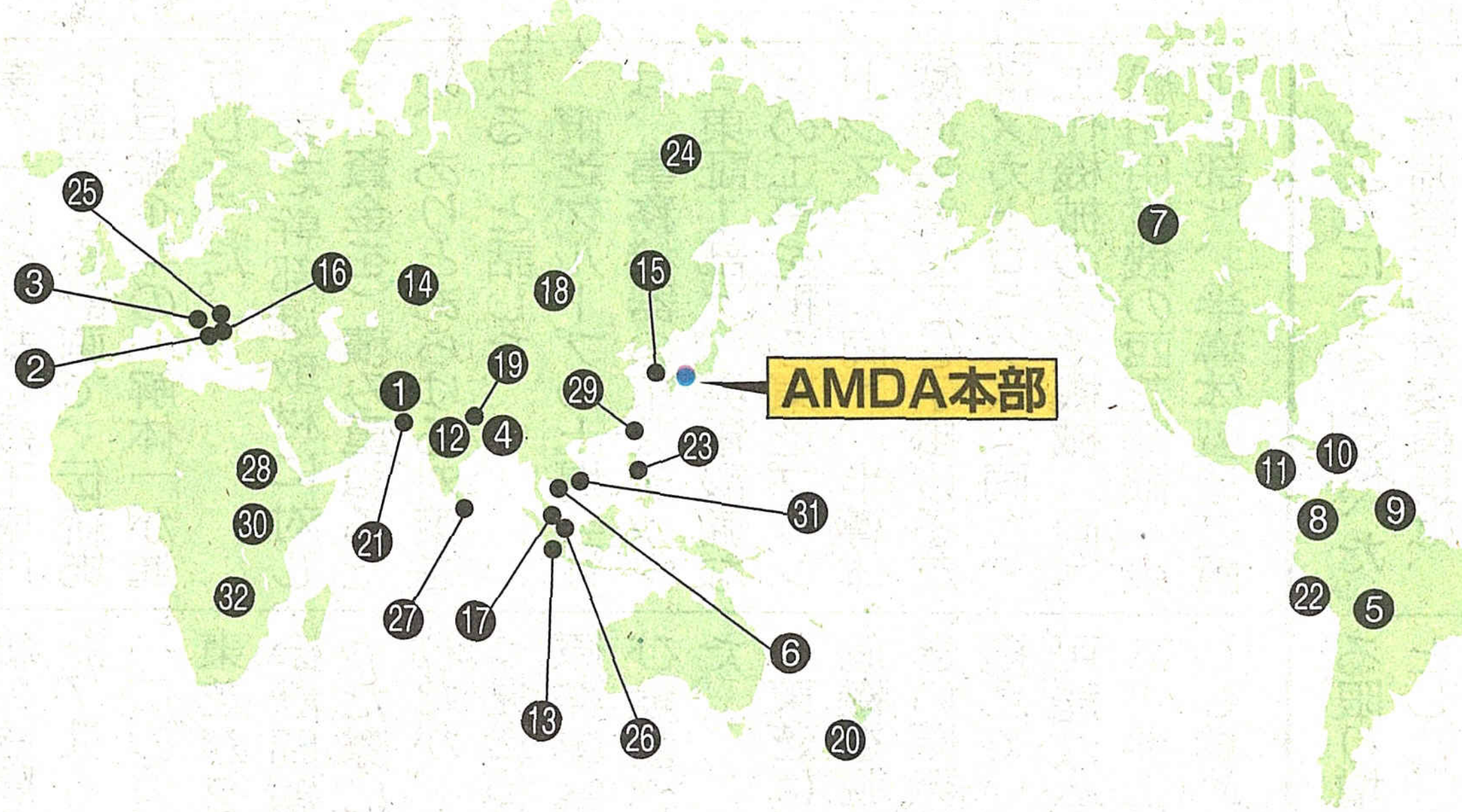
AMDAグループで海外での救援医療活動の中核を担うAMDAインターナショナルは、アジアを中心に32カ国・地域の海外支部で構成し、メンバーは現地スタッフら計約500人。災害・紛争時などはAMDA本部の呼び掛けに応じ、多国籍の医師や看護師らによる緊急医療支援チームを組織し、現地での巡回診療や救護所運営などに当たる。

インドネシアやバングラデシュ、インドなど草創期から活動する支部は、現地の医師らが日本留学や国際会議などを機にAMDAグループの菅波茂代表と親交を深

め、その理念に共感して母国に発足させたケースが目立つ。近年はハイチやザンビア、セルビアのように救援活動を共にした地元医師らが支部を立ち上げることも多く、アジアを超えた医療ネットワークを構築しつつある。

各支部は自主独立が原則で、本部とは対等な関係。多くが任意団体で、現地で法人登記するのはネパール支部のみ。6カ国計8病院に上る支部関連の病院・診療所も、それぞれ独立採算で運営されている。

事務局は地理的な利便性の高さからマレーシア・クアラルンプールに置く。本部・支部間はメールで緊密に情報交換するほか、毎年末にはアジア15カ国・地域の支部長会議を事務局で開催、年間の活動方針などを確認している。



- 支部
- ① アフガニスタン
  - ② アルバニア
  - ③ ボスニア・ヘルツェゴビナ
  - ④ バングラデシュ
  - ⑤ ボリビア
  - ⑥ カンボジア
  - ⑦ カナダ
  - ⑧ コロンビア
  - ⑨ ガイアナ
  - ⑩ ハイチ
  - ⑪ ホンジュラス
  - ⑫ インド
  - ⑬ インドネシア
  - ⑭ カザフスタン
  - ⑮ 韓国
  - ⑯ コンボ
  - ⑰ マレーシア
  - ⑱ モンゴル
  - ⑲ ネパール
  - ⑳ ニュージーランド
  - ㉑ パキスタン
  - ㉒ ペルー
  - ㉓ フィリピン
  - ㉔ サハ共和国(ロシア)
  - ㉕ セルビア
  - ㉖ シンガポール
  - ㉗ スリランカ
  - ㉘ スーダン
  - ㉙ 台湾
  - ㉚ ウガンダ
  - ㉛ ベトナム
  - ㉜ ザンビア

# 菅波茂 AMDA グループ代表

# 活動、情報収集の拠点

# 現地と協力、判断尊重

AMDAインターナショナル海外支部の役割や展望などについて、菅波茂AMDAGループ代表に聞いた。

(大橋洋平)

地域間紛争の激化や感染症のまん延など国際的な活動は厳しい時代を迎えている。

私たちの海外活動は現地の人間と協力し、その判断を尊重する「ローカルイニシアチブ」が原則。そのため1984年のAMDA設立以来、アジアを中心に人脈を広げ、活動や情報収集の拠点づくりを進めてきた。現地スタッフで構成する支部はその重要な足がかり。これまで33年間で紛争地を含め67カ国・地域180件の医療支援活動を展開してきたが、いまだ死者が出てい

ないのはそのおかげだ。

―多国籍医師団の存在は他のNGOにはない特徴だ。2012年のハイチ大地震では7カ国総勢40人が3カ月間、救援医療活動に従事した。

多くが病院勤務など仕事を抱えるボランティアで、無理なく活動するには各支部から少人数ずつ派遣するのが望ましい。幸いにも本部の要請に対し各支部は積極的に手を挙げてくれる。こうした活動を可能にするのは「オープン相互扶助」の精神。「困ったらお互いさま」を国境や共同体を超えた形で実践する。私たちのもう一つの基本原則と言える。

―各支部の機能充実をどう図るか。AMDAGでは南海トラフ巨大地震で深刻な被害が懸念される高知、徳島県



すがなみ・しげる 福山市(旧神辺町)出身。1977年に

岡山大学院医学研究科修了。岡山大病院勤務などを経て、84年に岡山市を本部とするAMDAGを設立。2008年から日本医師会国際保健検討委員会委員。クアラルンプール在住。70歳。

の9市町を岡山県内の医療機関などが支援するプロジェクトを進めている。

混乱を極めた東日本大震災での支援活動の反省に立ち、初めて災害の事前準備に着手するものだ。17年はこのモデルを海外でも実践し、支部を拠点に各国のNGOや医療施設、大学など一層の連携を深め、災害・紛争時の支援受け入れ態勢を強化していきたい。

―新たな国際人道支援事業として「世界平和パートナーシップ」(GPP)を掲げている。

テーマは「ビヨンドAMDA」(AMDAを超えて)。従来は団体への寄付だったが、今後は他組織とも協力し、組織の枠組みを超えたプロジェクトへの出資を募っていききたい。現在、平和構築▽生活向上▽教育支援▽健康支援

の4分野11事業を展開中だ。支部には緊急医療支援だけでなく、魅力的なプロジェクトを構築する能力も身に付けてもらいたい。

―海外支部の報告を通して訴えたい点は。

岡山県では2004年に全国初の国際貢献条例が制定されるほど県民の意識が高く、また医療・福祉先進県として弱者に寄り添う風土が息づいている。ぜひ災害や紛争などの不条理に苦しむ人たちの存在を知ってほしい。私たちの活動は小さなつながりを大切に

して、ここまで広がった。海外の現状を知ることでも生まれる県民一人一人のささやかな善意や興味が、明日の世界を切り開く原動力となると信じている。